

一章二節 統合場

すべての現象はふたつのカテゴリーによって理解しうる。すなわち、こころとものである。概念のレベルでは、こころとものを区別する。しかし、覚りのレベルでは、すべてはこころである。ものところはいづれも不可思議なものである。こころはものであり、ものはこころである。ものはこころの外部には存在しない。こころはものの外部には存在しない。それぞれがそれぞれのうちにある。これが「こころともの不二性」と呼ばれる⁽¹⁾。

龍樹「大智度論」より

さて、世界は本当に異質な二つの場によって構成されているのだろうか。それとも、それらの存在論的な二元性は「見かけ上」のものであり、究極的には何らかの一元性の中に包括されてしまうのであろうか。直観的には心とモノは全く別ものであるという二元論を信じたくなる。しかしながら本書は、そのような直観に反し、二元論ではなく、一元論的モデルを採用してみたい。二元論よりも一元論を採用する第一の理由は、ただ単純に、世界は異質な二種の素材から構成されていると考えるよりも、一つの素材から成ると考えるほうが、出来上がるモデルがよりシンプルで論理的矛盾が少ないものになると予測されるからである。モデルは可能な限り、シンプルで美しく、矛盾の無いほうが好ましい。世界を存在論的あるいは機能的に二つに分断して両者を何かしら奇跡的な方法で結び付けて調和させる方法もあるかもしれないが、世界を存在論的にも機能的にも一つの統合的な構造体として理解するほうが、よりシンプルで美しいモデルが出来上がると期待される（もし、そのような一元論的なモデルを構築することが不可能であるならば、次なる方法として二元論を採用したらよいだろう）。

先に述べたように、世界には明らかに性質の異なる二つの場が存在するように見える。しかしながら、本質的には、それらはただ一つの場の中に包括されるものであって、それが異質な二つの場として振る舞うように認知されているだけであると仮定してみる。意識場と物質場の活動に密接な相関関係があるという事実は両者のあいだに何らかのつながりがあることを示唆しており、究極的には両者を一つの統合的な場の内の出来事として扱えることが可能であって、二つの場の存在論的な二元性は（人間の認知システムに依存した）見かけ上のものであると仮定する。ただし、現実には人間は意識場と物質場を統合したようなかたちでの場の具体的な姿形を、知性や思考によって理解することはできないし、想像することもできない。よって、そのような場に関する知的概念は、現状では西洋哲学でいうところの形而上学（一切事象の背後にある根本原理を知的に理

解しようとする学問) となってしまうであろう。本書ではそのような一切を包括する形而上学的な場を、「統合場 (Integral field)」と名付ける。統合場は物質場と意識場を包括する根本的な場の概念である。

世界モデルの構築

私たち人間にとって、最も直接的な生の現実は「意識場」であろう。それが無ければ、知覚も思考も感情も意志も私自身という感覚も無い。意識場は私たちにとって真に価値ある心そのものであり、私たちそのものでもある。それは日常の生活の中で、私たちが直接アクセス可能な第一のリアリティである。

今、この意識場を出発点とした世界モデルを展開してみれば、意識場は本質的には根本場である「統合場」の何らかのはたらき (活動) によって生じていると考えることができる。統合場の活動によって意識場が起り、意識場の活動によって意識内容が生じる。意識内容が構造化されて場に「主」と「客」の二極が生じれば、主 (私) と客 (世界) は、分離独立した実体として認知されるようになる。統合場と意識場は存在論的には分離していない連続したものであり、意識場は統合場を基盤としている。この世にある無数の意識場はすべて統合場に包含される。

では、このような統合場と意識場の関係性の中において、客観的な実体であるモノや力、つまり「物質場」は何処に位置付けられるのであろうか。今、統合場の何らかのはたらきによって、意識場に「林檎」という現象が顕現したとする。そうすると、この意識場に一つの現象をもたらした統合場の状態やはたらきは、実際には物質という実体や、物質にはたらく力として解釈されることになるだろう。林檎という物質存在があって、その物理化学的情報が間接的あるいは直接的に各感覚器官に接触し、神経細胞において電気化学的信号に変換されて伝達され、その一連の情報は脳内の情報ネットワークシステムによって処理を受ける。統合場の本来の活動は、このような一連の物質 (場) の活動として論理的に理解されることになる。ある統合場の状態は特定の物質存在として認知され、ある統合場のはたらきは特定の物質場が媒介する力や作用として理解されることになる。

一切のクオリアの発現の舞台となる意識場そのものも、本来は根本場である統合場の活動によって生じているのだが、私たちはそれを特定のレベルの物質 (場) の活動によって生じていると解釈している。今のところ人の意識場を発現する統合場の活動は、主として神経生物学的なレベルでの物質場の活動として理解されている。

このように考えると、物質の場は、本来、実在してはいない。真の意味で実在していると言えるのは、形而上学的な場として導入した統合場のほうである。物質の場という

ものは、統合場に対しての私たちの論理的な理解もしくは解釈であるということになる。

図9に示すように、まずそこにはあらゆる事象を包含する統合場がある。そのはたらしきによって意識場が起これ、その場の内には主客二元構造である「自我／自己」と「非自己（世界）」が生まれる。非自己である世界は自己と分断されて、客観的な物質場として実体化されることになる。物質場は意識場の活動によって仮構されているが、物質場の見かけ上の実在性は、統合場の真の実在性に由来している。物質の場は、物質の場

図9 統合場と意識場、物質場と自我

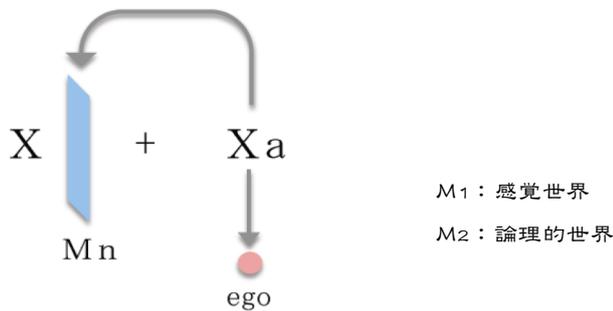
- (1) 統合場 (X)

X

- (2) 統合場 (X) + 意識場 (Xa)

X + Xa

- (3) {統合場 (X) + 意識場 (Xa)}、物質場 (Mn)、自我 (ego)



- (1) 統合場 (X) がある。

- (2) 統合場 (X) の活動の結果、その限定態として意識場 (Xa) が現れる。

意識場の活動は意識内容を生む。

- (3) 意識場の活動が展開、統合し、「主」「客」二元の心理学的構造が生まれる。

- ① 「客」は、物質場 (Mn) として認知されるようになる。(実体化される)
- ・ 感覚世界 (M1) は「心の粗大レベルの働き」によって実体化される。
 - ・ 論理的世界 (M2) は「論理的な心の粗大レベルの働き」によって実体化される。
 - ・ 物質場 (Mn) の見かけ上の実在性は、統合場の真の実在性に由来する。
- ② 意識場内の五蘊は集束して、主体 (自我; ego) を仮構する。

自身として実在しているというよりも、それは統合場に対しての私たちの論理的解釈である。

物質場というものは、心の粗大レベルによって仮構されている。粗大レベルの心のはたらきによって、物質場はクオリアに彩られた「感覚世界」として実在化される。また、高次の「想」の機能を伴う粗大レベルの心のはたらき（つまり、論理的思考力）によって、物質場は美しい数式で表現される「論理的世界」として実在化される。統合場という一つの場の状態とはたらきは、私たちの認知のはたらきに応じて多様な世界として具現化されている。

1 テイク・ナット・ハン「禅への鍵」藤田一照（訳）、春秋社（2001）七六～七七頁